

剰余演算を用いたフェルマーの最終定理の証明

東森秀朋 2021.11.26

要約

フェルマーの等式は、算術演算において成立するならば、剰余演算において必ず成立する。しかし、フェルマーの等式は、剰余演算において成立しても、算術演算において必ずしも成立しない。ただ、フェルマーの等式は、剰余演算において成立しないならば、算術演算において決して成立しない。

そこで、指数が素数 p のフェルマーの等式が算術演算において成立しないことを証明するために、指数が素数 p のフェルマーの等式が剰余演算において成立しないことを証明する。

この証明により、指数が素数 p のフェルマーの等式を算術演算において成立させる自然数 A 、 B および C は存在しないことが証明される。

1. 始めに

指数が素数 p のフェルマーの等式は次のとおりである。

$$A^p + B^p = C^p \quad (1.1)$$

次のことはヒース・ブラウン等により既に証明されている。

“指数 p と $kp + 1$ が共に素数であるならば、フェルマーの最終定理は成立する($k = 2, 3, \dots$)。また、 n と $kn + 1$ が共に素数である素数は無数に存在する。”

しかしながら、あらゆる素数 p の指数に対してフェルマーの最終定理の初等代数学のみを用いた証明はなされていない。

自然数 A 、 B 及び C は互いに素である。

$\left(\frac{Q}{R}\right)$ は自然数 Q を自然数 R で剰余演算したときの剰余である。

中央の表記が正しいが、右辺のように表記する。

自然数 R 自然数 S

$$\left(\frac{QS}{RT}\right) = \left(\frac{\left(\frac{Q}{RT}\right)\left(\frac{S}{RT}\right)}{RT}\right) = \left(\frac{Q}{RT}\right)\left(\frac{S}{RT}\right) \quad \left(\frac{Q \pm S}{RT}\right) = \left(\frac{\left(\frac{Q}{RT}\right) \pm \left(\frac{S}{RT}\right)}{RT}\right) = \left(\frac{Q}{RT}\right) \pm \left(\frac{S}{RT}\right)$$

2. 等式(2.2.3)の導出

2.1 等式(2.1.3)の導出

フェルマーの等式(1.1)が算術演算において成立するならば、指数が素数 p の2

個の等式(2.1.1)及び(2.1.2)を算術演算において成立させる自然数 X, Y は必ず存在する.

自然数 X, Y, B 及び C は互いに素である. B 及び C は因子 $(2p + 1)$ を含まない.

$$X = C^p - B^p \quad (2.1.1)$$

$$Y = C^p + B^p \quad (2.1.2)$$

上記等式(2.2)と等式(2.3)の両辺を乗算すると, 次の等式(2.1.3)が成立する.

$$XY = (C^p - B^p)(C^p + B^p) = C^{2p} - B^{2p}$$

$$XY = C^{2p} - B^{2p} = (C^2 - B^2)(\sum_{i=1}^p C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}) \quad (2.1.3)$$

上記等式(2.1.3)は, 算術演算において成立するから, 因子 $(2p + 1)$ による剰余演算において成立しなければならない. それ故, 次の等式(2.1.4)が成立しなければならない.

$$\left(\frac{XY}{2p+1}\right) = \left(\frac{C^{2p}-B^{2p}}{2p+1}\right) = \left(\frac{C^2-B^2}{2p+1}\right) \left(\frac{\sum_{i=1}^p C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) \quad (2.1.4)$$

2.2 等式(2.2.3)の導出

等式(2.1.4)の右辺の剰余演算の総和部分について以下に検討する.

$$\left(\frac{\sum_{i=1}^p C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) = \sum_{i=1}^p \left(\frac{C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) = \sum_{i=1}^p \left(\frac{(C^{(p-i)} B^{(i-1)})^2}{2p+1}\right) \quad (2.2.1)$$

$$D = (C^{(p-i)} B^{(i-1)}) \quad D^2 = (C^{(p-i)} B^{(i-1)})^2$$

因子 $(2p + 1)$ による剰余演算における D 及び D^2 の剰余は以下に示すようにそれぞれ $2p$ 個と p 個に限られる.

$$C : 1 \quad 2 \quad 3 \quad \dots \quad p \quad p+1 \quad \dots \quad p+i \quad \dots \quad 2p$$

$$C^2 : 1 \quad 4 \quad 9 \quad \dots \quad p^2 \quad (p+1)^2 \quad \dots \quad (p+i)^2 \quad \dots \quad (2p)^2$$

$$i = 1 \sim p$$

$$D : 1, \quad 2, \quad 3, \dots, p, \quad p+1, \dots, p+i, \dots, 2p-1, \quad 2p$$

$$\left(\frac{D}{2p+1}\right) : \left(\frac{1}{2p+1}\right), \left(\frac{2}{2p+1}\right), \left(\frac{3}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{p}{2p+1}\right), \left(\frac{p+1}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{p+i}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{2p-1}{2p+1}\right), \left(\frac{2p}{2p+1}\right)$$

$$D^2 : 1, \quad 4, \quad 9, \dots, p^2, \quad (p+1)^2, \dots, (p+i)^2, \dots, (2p-1), \quad (2p)^2$$

$$(p+i)^2 = p^2 + 2ip + i^2 = (p-i+1)^2 + (2i-1)(2p+1)$$

$$\left(\frac{(p+i)^2}{2p+1}\right) = \left(\frac{(p-i+1)^2 + (2i-1)(2p+1)}{2p+1}\right) = \left(\frac{(p-i+1)^2}{2p+1}\right)$$

$$\left(\frac{D^2}{2p+1}\right) : \left(\frac{1}{2p+1}\right), \left(\frac{4}{2p+1}\right), \left(\frac{9}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{p^2}{2p+1}\right), \left(\frac{(p+1)^2}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{(p+i)^2}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{(2p-1)^2}{2p+1}\right), \left(\frac{(2p)^2}{2p+1}\right)$$

$$\left(\frac{D^2}{2p+1}\right) : \left(\frac{1}{2p+1}\right), \left(\frac{4}{2p+1}\right), \left(\frac{9}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{p^2}{2p+1}\right), \left(\frac{p^2}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{(p-i+1)^2}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{4}{2p+1}\right), \left(\frac{1}{2p+1}\right)$$

以上のとおり, 因子 $(2p + 1)$ による剰余演算における D^2 の剰余は以下に示す p

個に限られる.

$$\left(\frac{D^2}{2p+1}\right) : \left(\frac{1}{2p+1}\right), \left(\frac{4}{2p+1}\right), \left(\frac{9}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{j^2}{2p+1}\right), \dots, \left(\frac{(p-2)^2}{2p+1}\right), \left(\frac{(p-1)^2}{2p+1}\right), \left(\frac{p^2}{2p+1}\right) \quad (2.2.2)$$

上記等式(2.2.1)の右辺は, 因子 $(2p+1)$ による剰余演算における p 個の剰余の総和である. その p 個の剰余の各々は上記 D^2 の p 個の剰余(2.2.2)の何れかに必ず一致する. 即ち, 次の等式が成立する.

$$\left(\frac{C^{2(p-i)}B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) = \left(\frac{(C^{(p-i)}B^{(i-1)})^2}{2p+1}\right) = \left(\frac{j^2}{2p+1}\right) \quad i = 1 \sim p \quad j = 1 \sim p$$

それ故, 上記等式(2.2.1)の右辺の総和は以下の如く書き換えられ, 以下の等式(2.2.3)が成立する.

$$\begin{aligned} \left(\frac{\sum_{i=1}^p C^{2(p-i)}B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) &= \sum_{i=1}^p \left(\frac{C^{2(p-i)}B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) = \sum_{i=1}^p \left(\frac{(C^{(p-i)}B^{(i-1)})^2}{2p+1}\right) \\ &= \sum_{j=1}^p j^2 = p(p+1)(2p+1)/6 \\ &= \sum_{j=1}^p \left(\frac{j^2}{2p+1}\right) = \left(\frac{\sum_{j=1}^p j^2}{2p+1}\right) = \left(\frac{p(p+1)(2p+1)/6}{2p+1}\right) \end{aligned}$$

以上のとおり, p は素数であるが, $(2p+1)$ が素数であるか否かに関係しないで, 下記等式(2.2.3)は成立する.

$$\left(\frac{\sum_{i=1}^p C^{2(p-i)}B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) = \left(\frac{p(p+1)(2p+1)/6}{2p+1}\right) \quad (2.2.3)$$

3. 等式 (3.3.3) の導出

3.1 素数の生成

自然数の 2 乗和の公式は次のとおりである.

$$\sum_{i=1}^k i^2 = 1 + 2^2 + 3^2 + \dots + (k-2)^2 + (k-1)^2 + k^2 = k(k+1)(2k+1)/6$$

自然数の 2 乗和は整数であるから, $k(k+1)(2k+1)$ は数 6 で割り切れる.

$p_k = 2k+1$ が数 5 以上の素数であるとき, $(2k+1)$ は数 6 で割り切れない.

そのとき, k または $k+1$ は, いずれかは偶数であるから, 数 3 の倍数である.

その結果, 素数 p_k は次の 2 系列で生成される.

2 系列の相違を明確にするため, 以下のように表記する.

m は自然数

$$k = 3m \quad p_+ = 6m + 1$$

$$k + 1 = 3m \quad p_- = 6m - 1$$

表記から判るように, 素数 5 以上のあらゆる素数は上記 2 系列の素数 p_+ または素数 p_- として生成される.

3.2 素数 p が素数 p_+ のとき

素数 p が素数 p_+ のとき，上記等式(2.2.3)は次の等式(3.2.1)に書き換えられる．

$$\begin{aligned}
 p_+ &= 6m + 1 \\
 \left(\frac{\sum_{i=1}^{p_+} C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}}{2p_+ + 1} \right) &= \left(\frac{p_+(p_+ + 1)(2p_+ + 1)/6}{2p_+ + 1} \right) \\
 &= \left(\frac{(6m+1)(6m+2)(12m+3)/6}{12m+3} \right) \\
 &= \left(\frac{(6m+1)(3m+1)(4m+1)}{3(4m+1)} \right) \tag{3.2.1}
 \end{aligned}$$

そして，上記等式(2.1.4)は上記等式(3.2.1)を用いて次のように書き換えられる．

$$\begin{aligned}
 \left(\frac{XY}{2p+1} \right) &= \left(\frac{C^{2p} - B^{2p}}{2p+1} \right) = \left(\frac{C^2 - B^2}{2p+1} \right) \left(\frac{\sum_{i=1}^p C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}}{2p+1} \right) \\
 &= \left(\frac{C^2 - B^2}{3(4m+1)} \right) \left(\frac{(6m+1)(3m+1)(4m+1)}{3(4m+1)} \right) \\
 &= \left(\frac{(C^2 - B^2)(6m+1)(3m+1)(4m+1)}{3(4m+1)} \right) \\
 &= \left(\frac{(C^2 - B^2)(6m+1)(3m+1)}{3} \right) \\
 &= \left(\frac{C^2 - B^2}{3} \right) \left(\frac{(6m+1)(3m+1)}{3} \right) = 0
 \end{aligned}$$

自然数 B 及び C は，因子 $(2p + 1)$ と互いに素であるから，数 3 を含まない．

$$\left(\frac{C^2 - B^2}{3} \right) = 0 \quad \left(\frac{(6m+1)(3m+1)}{3} \right) = 1$$

つまり，素数 p が素数 p_+ のとき，上記等式(2.1.4)の右辺は， B 及び C の如何に関わらず，上記のように零 0 に等しい．

3.3 素数 p が素数 p_- のとき

素数 p が素数 p_- のとき，上記等式(2.2.3)は次のように書き換えられる．

$$\begin{aligned}
 p_- &= 6m - 1 \\
 \left(\frac{\sum_{i=1}^{p_-} C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}}{2p_- + 1} \right) &= \left(\frac{p_-(p_- + 1)(2p_- + 1)/6}{2p_- + 1} \right) \\
 &= \left(\frac{(6m-1)(6m)(12m-1)/6}{12m-1} \right) \\
 &= \left(\frac{(6m-1)(m)(12m-1)}{12m-1} \right) = 0
 \end{aligned}$$

上記等式(3.2.1)を用いて上記等式(2.1.4)は次の等式(3.3.2)に書き換えられる．

$$\left(\frac{XY}{2p_{-}+1}\right) = \left(\frac{C^{2p_{-}} - B^{2p_{-}}}{2p_{-}+1}\right) = \left(\frac{C^2 - B^2}{2p_{-}+1}\right) \left(\frac{\sum_{i=1}^{p_{-}} C^{2(p_{-}-i)} B^{2(i-1)}}{2p_{-}+1}\right) = 0 \quad (3.3.2)$$

つまり，素数 p が素数 p_{-} のとき，上記等式(2.1.4)の右辺は， B 及び C の如何に関わらず，零 0 に等しい．

以上のとおり， B 及び C の如何に関わらず，次の等式(3.3.3)が成立する．

$$\left(\frac{XY}{2p+1}\right) = \left(\frac{C^{2p} - B^{2p}}{2p+1}\right) = \left(\frac{C^2 - B^2}{2p+1}\right) \left(\frac{\sum_{i=1}^p C^{2(p-i)} B^{2(i-1)}}{2p+1}\right) = 0 \quad (3.3.3)$$

4. フェルマーの等式(1.1)について

4.1 自然数 C 及び B のどちらも因子 $(2p+1)$ を含まないとき

前節の等式(3.3.3)からして，次の等式(4.1.1)又は(4.1.2)の何れかが成立する．

$$\left(\frac{X}{2p+1}\right) = 0 \quad (4.1.1)$$

$$\left(\frac{Y}{2p+1}\right) = 0 \quad (4.1.2)$$

上記等式(4.1.2)が成立するとき，以下に示すように，下記等式(4.1.3)が成立しなければならない．

$$\left(\frac{Y}{2p+1}\right) = \left(\frac{C^p + B^p}{2p+1}\right) = \left(\frac{C^p}{2p+1}\right) + \left(\frac{B^p}{2p+1}\right) = 0$$

$$\left(\frac{C^p}{2p+1}\right) = -\left(\frac{B^p}{2p+1}\right)$$

$$\left(\frac{X}{2p+1}\right) = \left(\frac{C^p - B^p}{2p+1}\right) = \left(\frac{2C^p}{2p+1}\right) \quad (4.1.3)$$

したがって，フェルマーの等式(1.1)が成立するためには次の等式(4.1.4)が成立しなければならない．

$$\left(\frac{A^p}{2p+1}\right) = \left(\frac{X}{2p+1}\right) = \left(\frac{2C^p}{2p+1}\right)$$

$$A^p = 2C^p \quad (4.1.4)$$

しかしながら，上記等式(4.1.4)を成立させる自然数 A は存在しない．

4.2 自然数 A 及び B のどちらも因子 $(2p+1)$ を含まないとき

次の等式(4.2.1)及び(4.2.2)を成立させる自然数 U 及び V は必ず存在する．

自然数 U, V, A 及び B は互いに素である．

$$A^p - B^p = U \quad (4.2.1)$$

$$A^p + B^p = V = C^p \quad (4.2.2)$$

前節 4.1 と同様に、次の等式(4.2.3)又は(4.2.4)の何れかが成立しなければならない。

$$\left(\frac{U}{2p+1}\right) = 0 \quad (4.2.3)$$

$$\left(\frac{V}{2p+1}\right) = 0 \quad (4.2.4)$$

上記等式(4.2.3)が成立するとき、以下に示すように、下記等式(4.2.5)が成立しなければならない。

$$\left(\frac{U}{2p+1}\right) = \left(\frac{A^p - B^p}{2p+1}\right) = \left(\frac{A^p}{2p+1}\right) - \left(\frac{B^p}{2p+1}\right) = 0$$

$$\left(\frac{A^p}{2p+1}\right) = \left(\frac{B^p}{2p+1}\right)$$

$$\left(\frac{V}{2p+1}\right) = \left(\frac{A^p + B^p}{2p+1}\right) = \left(\frac{2A^p}{2p+1}\right) \quad (4.2.5)$$

したがって、フェルマーの等式(1.1)が成立するためには次の等式(4.2.6)が成立しなければならない。

$$\left(\frac{C^p}{2p+1}\right) = \left(\frac{V}{2p+1}\right) = \left(\frac{2A^p}{2p+1}\right)$$

$$C^p = 2A^p \quad (4.2.6)$$

しかしながら、上記等式(4.2.6)を成立させる自然数 C は存在しない。

以上のとおり、指数が素数 p のフェルマーの等式(1.1)を成立させる自然数 A 、 B 及び C は存在しないから、フェルマーの最後定理は成立する

5. 結論

フェルマーの等式は、算術演算において成立するならば、剰余演算において必ず成立する。しかし、フェルマーの等式は、剰余演算において成立しても、算術演算において必ずしも成立しない。ただ、フェルマーの等式は、剰余演算において成立しないならば、算術演算において決して成立しない。

それ故、指数が素数 p のフェルマーの等式は剰余演算において成立しないことを証明することにより、指数が素数 p のフェルマーの等式を算術演算において成立させる自然数 A 、 B および C は存在しないことが証明された。

6. 参考文献

- [1] L. Riddle, "Sophie Germain and Fermat's Last Theorem," Agnes Scott College, 2009.
<http://www.agnesscott.edu/Lriddle/women/germain-FLT/SGandFLT.htm>
- [2] Colleen-Alkalay-Houlihan, "Sophie Germain and Special Cases of Fermat's Last Theorem"
<https://www.math.mcgill.ca/darmon/courses/12-13/nt/projects/Colleen-Alkalay-Houlihan.pdf>
- [3] B. B. U. Perera, R. A. D. Piyadasa "Proof of Fermat's Last Theorem for $n = 3$ Using Tschirnhaus Transformation" 2016
https://link.springer.com/chapter/10.5176/2251-1911_CMCGS14.34_12#citeas
- [4] Kunle Oladeji Babalola "A simple proof of the fermat's last theorem" 2010
https://www.researchgate.net/profile/Kunle-Oladeji-Babalola/publication/328164214_A_SIMPLE_PROOF_OF_THE_FERMAT'S_LAST_THEOREM/links/5bbc92f792851c7fde372fa6/A-SIMPLE-PROOF-OF-THE-FERMATS-LAST-THEOREM.pdf
- [5] Piyadasa, R.A.D. "A simple analytical proof of Fermat's last theorem for $n = 7$ " 2010
<http://repository.kln.ac.lk/handle/123456789/4753>
- [6] C.U.Ubeynarayana, R.A.D. Piyadasa, & J.Munasinghe "Roots of a cubic and simple proof of Fermat's last theorem for $n=3$ " 2013
<https://www.researchgate.net/publication/343282033>
- [7] Zhang Yue "A simple proof on Fermat's last theorem in case of $n=3$ " 2020
<https://www.mathematicaljournal.com/article/9/1-1-17-231.pdf>
- [8] P. N. Seetharaman "A Proof of Fermat's Last Theorem using an Euler's equation" 2017
- [9] Youngik Lee "Numerical Approach for Fermat's last theorem" 2019

- <https://arxiv.org/pdf/1912.04046.pdf>
- [10] Kaida Shi "The n-Dimensional Cube---A New Approach to Prove Fermat's Last Theorem" 2010
https://www.researchgate.net/profile/Kaida-Shi-2/publication/2108398_The_n-dimensional_Cube--A_New_Way_to_Prove_the_Fermat's_Last_Theorem/links/5f6fc453a6fdcc00863e154f/The-n-dimensional-Cube--A-New-Way-to-Prove-the-Fermats-Last-Theorem.pdf
- [11] John Sherrill "An Elementary Proof of Fermat's Last Theorem" 2017
<http://www.sciencepublishinggroup.com/j/ml>
- [12] M.Meyyappan "Resolving Fermat's Last Theorem by Prime Factor Method and Proof in 5 steps" 2017
<http://www.ijmtjournal.org/2017/Volume-46/number-1/IJMTT-V46P510.pdf>
- [13] Vinay Kumar "Proof of Beal's conjecture and Fermat last theorem using contra positive method" 2018
<https://www.researchgate.net/publication/326630714>
- [14] Bhupinder Singh Anand "An Elementary Pre-formal Proof of FLT" 2021
<https://philarchive.org/archive/ANAAEPv2>
- [15] Mollin R.A. "How to prove Fermat's last theorem" 2009
<https://www.scopus.com/home.uri>
- [16] Dora Musielak "Germain and Her Fearless Attempt to Prove Fermat's Last Theorem" 2020
<https://arxiv.org/pdf/1904.03553.pdf>
- [17] X. S. Zhang "Fermat's last theorem proved by a simple method" 1991
<https://www.sciencedirect.com/science/article/abs/pii/0013794491900394?via%3Dihub>
- [18] D.R. Heath-Brown and L.M. Adleman "The first case of Fermat's last theorem" June 1985 *Inventiones mathematicae* 79(2):409-416
<http://eudml.org/doc/143203>